

AWC日本連通信

日米のアジア支配に反対し、アジア民衆の連帯を推進する日本連絡会議

第31号 発行：2026年7月31日
京都市南区東九条西山王町7きずな気付
H.P. <http://www.awcjapan.org>
e-mail: awcjapan21@yahoo.co.jp

国際連帯を妨害する高市政権を弾劾する！

今号の記事

6月アジア共同行動と入国拒否問題、各地集会の報告、海外連帯メッセージ
5月宮古島・沖縄島訪問団の報告
AWC コース「イスラム学習会の報告」

2026 後半 AWC日本連の主な活動計画

8月23日 日本連全国会議(13:30、キャンパスプラザ京都第5講習室)
10月14-16日 南京大虐殺記念館などを訪問(中国・南京市)
10月17-18日 グローバルサウス学術フォーラムに参加(中国・上海市)
11月韓国労働者大会に参加(韓国・ソウル市など)
11月14, 15日 2026 岩国行動(山口県岩国市、他オプション企画あり)



高市政権・外務省・法務省に抗議のメールを送って下さい！

国際連帯を封じ込める不当な入国妨害に抗議の声を広げよう！日本政府・関係省庁に抗議の意思を送ろう！（下記の「ご意見ご感想送付フォーム」から無記名でも送れます。※はひな型です）

●首相官邸 https://www.kantei.go.jp/jp/forms/goiken_ssl.html

※海外との民衆交流を制限・妨害する政策を取り消せ！ スパイ防止法を許さない！

●外務省 <https://www2.contact.mofa.go.jp/form/pub/mofaj/feedback>

※入国妨害を弾劾する！ 元フィリピン国会議員のビザ申請を却下した理由を明らかにせよ！

●法務省 <https://www.moj.go.jp/mojmail/kouhouinput.php>

※20年前の労働争議関連の有罪判決（執行猶予付）による入国拒否は人権侵害だ！撤回せよ！

2026年6月アジア共同行動 各地集会 報告

前号でお知らせしたように、今年は6月26日～7月3日まで、フィリピンと韓国からそれぞれゲストを招請し、4か所（東京、京都、大阪、神戸）での取り組みが準備されていました。

●海外ゲストへの入国妨害が相次ぐ

しかし、到着日の前日になってフィリピンのテディ・カシーノ現バヤン議長にビザが発給されず（理由不明）、訪日を断念せざるを得ませんでした。また予定通りに韓国から羽田空港に到着した民主労総公共運輸労組元委員長イ・サンムさんが入国審査で執拗な調査を受けているという一報に、AWC会員たちが何度も空港入管に抗議電話を入れました。が、これまでの入国拒否事例ではしつこくでも私たちの照会に応じて状況を説明していたのに、「この電話では何も答えられない」と職員が言うのみで、そのうち電話をかけてもガチャ切りされるようになり、しばらくすると誰も

取らない状態に。そして、数時間の調査の末に韓国ゲストの入国が拒否されてしまう結果になりました。

AWC日本連は、海外ゲスト2名の入国拒否という事態に、直ちに抗議声明を出し、国際交流への露骨な妨害に強く抗議しました。また、首相官邸・外務省・法務省への抗議メール送りを呼びかけました。

韓国では6月30日に、日本大使館への抗議街頭記者会見、入国拒否の理由が約20年前の労働争議での執行猶予付き判決だということで、韓国大統領宛にこのような不当な前科を赦免するなど問題の早期解決に尽力せよと求める街頭記者会見が連続して行なわれ、マスコミが取材して記事が掲載されました。

●画面を通じて海外ゲストの報告を聞く

韓国ゲストのイ・サンムさんはやむなく深夜の飛行機で帰国し、翌日の東京でのAWC講演集会ではオンラインでの報告をしていただくことができました。フ

フィリピンの国会議員を長年務めたデディ・カシーノさんは、日本政府が不当にもビザを発給しませんでした、ビデオレターを作成して送って下さいました。さらに東京と京都の集会ではバヤン日本支部が来場して講演を行っていただくことができました。

大阪での労働運動交流会は、直接交流ができないため、残念ですが今回は中止、最終的には東京、京都、神戸の3つの集会で、海外ゲストからの報告を受けることができました。

韓国報告：準備されていたパワーポイントの内容は、ユン・ソギョルのクーデターを食い止めた市民の力、イ・ジェミョン政権一年間の一部の成果と、米韓軍事同盟や資本家の利益中心という意味で前政権と変わりが無いイ・ジェミョン政権の限界、その中で、半導体など一部大企業の正規職エリート労働者が空前の臨時ボーナスを受け取る一方で、労働者としての権利すらまともに保障されない中小零細・非正規・請負労働者や移民を含むその他の多くの労働者との格差拡大、小選挙区制のために少数政党が息の根をふさがれ、巨大保守二大政党だけが生き残り、民衆の意思が政治に反映されなくなる現状などが報告されて、韓国社会が抱える問題がよくわかるしっかりした内容でした。

また、イ・サンムさんは介護ヘルパー（韓国では療養保護士という）でもあり、その職能団体である全国療養保護士協会を組織していて、別途に報告も準備されていたので、神戸集会で報告をしてもらうことができました。これは、日韓の違いや共通点の両面で参加者の関心が高かったのも、後日オンラインなどで報告を受ける機会を作ってもよいかもしれません。

フィリピン報告：20分弱のビデオレターの内容が非常に充実したフィリピンの現情勢のトータルな報告になっていました。特にフィリピンを舞台としたアメリカの軍事戦略（中国封じ込めの列島線戦略＝アイランド・チェーン）と経済戦略（半導体・AI・重要鉱物・物流・デジタルインフラのバリュー・チェーン）の関係、そこに軍事的に乗り込んでくる日本の問題点がよくわかるものでした。日本とフィリピンは昨年9月に日比円滑化協定（RAA）を発効させ、自衛隊とフィリピン国軍が演習や作戦のため互いの領土に入ることができるようになりました。日本がフィリピンに軍事的プレゼンスを維持する法的枠組みを得たことは、フィリピンを占領した日本軍の再来となるものです。さらに今年1月には物品役務相互提供協定（ACSA）が締結されました。カシーノさんは、米日比が合意した「ルソン経済回廊」を取り上げ、それは軍事的・経済的利益のためのものであって民衆のためのものではない、民衆の回廊を作り「アジアを戦場にする」と叫

ぼう」と訴えました。また急遽来場してくれたバヤン日本支部は、「米国の戦争を終わらせよう！民衆の命と生活を守ろう！」と、国際連帯による、現在の日比の戦争同盟づくりとの闘いを力強く呼びかけてくれました。

米国と台湾からの連帯メッセージ：このほかにも、台湾労働党・労働人権協会の連帯メッセージ、昨年の岩国行動に参加した米国のレジストからのビデオレター（4頁以降に掲載）などで豊かな内容でした。

●各地集会を振り返って

◆京都

6月28日AWC京都集会では、連帯あいさつとして、ミグランテ日本支部、若狭の原発を考える会、連帯労組関生支部、AWCユースの発言を受け、京都駅に向かうデモも行いました。AWC外の人々の参加が少なく、対外的な呼びかけと組織化が大きな課題です。

◆神戸

また、神戸では昨年以来、アジア労働者交流集会in神戸が再開され、今年は7月1日に開催されました。ハングルを学ぶ方々による韓国民衆歌のコーラスに、画面の向こうで韓国ゲストと一緒に歌っていた姿や、海外報告への活発な質疑が行われたのが印象的でした。



韓国民衆歌のコーラス(7/1 神戸)

◆東京

6月27日の東京でのAWC講演集会は、台風が接近・通過する中、会場でのハイブリッド講演集会として実施し、中国の闘う仲間からの発言も受け、集会内容も豊富でよいものでした。

関東では、昨年春にハラスメント加害者とその擁護側により「AWC首都圏」が一方向的に凍結され、運動が破壊されて以降、それに代わる運動として、「AWC関東準備会」が作られ、この1年間ハラスメント被害当事者とともに活動と議論を継続してきました。6月



東京での 6/27 AWC 講演集会

集会は、そのAWC関東準備会が主催する予定で準備を始めましたが、これまでの運動の進め方の改善は簡単ではなく、さらに準備過程でハラスメント問題への理解不足から複数の問題が発生したことで、最終的にAWC関東準備会として主催できないという判断にな

りました。集会は、AWC日本連呼びかけの形で開催されましたが、今もまだ問題の解決には至っていません。このことは関東だけの問題ではなく、ハラスメントを許さないAWC運動を作っていく全国的な課題として確認しておきたいと考えます。(以上)

<AWC 日本連 抗議声明>

新たな入国拒否弾圧を弾劾する！ 民衆の国際連帯への妨害を許すな！

在マニラ日本大使館は6月25日、AWC日本連が6月27日から7月1日にかけて各地で開催するアジア共同行動集会に発言者として参加するために、フィリピン新民族主義者同盟（BAYAN）代表が申請していたビザの発給を拒否した。さらに翌6月26日には、同様に発言者として来日するために羽田空港に到着した韓国の民主労総活動家に対して長時間の入国審査を行ったうえで、最終的にその入国を拒否した。

これらは明らかな政治弾圧である。それはあからさまに私たち AWC 日本連の活動の妨害を狙い、民衆運動の国際連帯の広がりをおしつぶそうとするものである。私たちはこの日本政府の暴挙を、怒りを込めて徹底弾劾する。

日米帝国主義のアジア支配・侵略に反対し、アジア太平洋各地の民衆運動の反帝国主義にもとづく共同闘争を推進してきた AWC のたたかいは、これまでも日本政府による弾圧に直面してきた。例えば、AWC 国際代表／AWC 韓国委員会代表の長期にわたる入国拒否・入国妨害であり、2023 年 G7 広島サミット反対闘争の際の入国拒否弾圧である。今回の弾圧はその最

新のものであると同時に、一連の取り組みのメインのゲスト・スピーカーの入国を二人とも拒否・妨害したという点で極めて悪質であり、弾圧のエスカレーションを示すものである。

現在、高市政権は大軍拡・侵略戦争体制づくりをおし進めると同時に、国家情報局の創設とスパイ防止法の制定策動など、戦争体制づくりと結びついた諜報体制・治安弾圧体制の強化を急ぎ、反戦運動や労働運動をはじめとする労働者・民衆のたたかいへの監視と弾圧を強めている。今回の入国拒否弾圧は、そのような高市政権の動向と軌を一にしたものである。

しかし、どのような弾圧も、私たちのたたかい、民衆の国際連帯を打ち砕くことはできない。私たちはエスカレートする弾圧を許さず、反戦・反基地闘争や労働者の権利を守るたたかいを推進し、アジア太平洋各地の労働者・民衆との反帝国主義にもとづく連帯と共同闘争をさらにいっそう前進させていく。

2026 年 6 月 27 日
アジア共同行動（AWC）日本連絡会議

<「AWC 韓国委員会」・「日本の入国拒否で強制送還された活動家の会」の抗議声明>

李在明大統領は日本政府の韓国人活動家への強制送還に対策を講じよ！

6 月 26 日、アジア地域の反戦平和団体である AWC 日本連絡会議が主催する各地での討論会に参加するため、日本の羽田空港に到着したイ・サンム前民主労総京畿地域本部長（公共運輸労組委員長）が日本当局により入国を拒否され、強制送還された。

20 年以上前の韓国での労働運動の過程での出来事を口実に日本への入国を拒否したのだ。日本政府は何度も韓国人労働者、農民、環境活動家、平和活動家の日本入国を拒否し、強制送還してきた。2008 年 7 月、北海道洞爺湖で開催された G7 首脳会議に合わせて日本に入国しようとしていた労働者（民主労総）と農民（全農）を強制的に拘束し、その後追放した。その後、アジア地域の反戦平和団体 AWC の活動家に対しては、何度も入国拒否や強制送還を続けている。





帝国主義の支配階級に突き動かされ、米国は人類史上最も破壊的な戦争機構を築き上げました。米国が足を踏み入れる場所ではどこであれ、大量の死、強制立ち退き、そして破滅がもたらされます。第二次世界大戦の終結以来、米国は帝国主義の超大国としての役割を利用し、市場の拡大や米国の支配階級の利益に対するあらゆる脅威に対抗するために戦争を仕掛けてきました。今、米国は建国以来 250 年で最大の危機に直面し、世界経済に占めるシェアが 1960 年当時から

台灣労働党・台湾労働人権協会

一方、今週に入って、米国はアジア太平洋地域で「ヴァリアント・シールド 2026」と「レゾリュート・ドラゴン 2026」という二つの大規模な演習を開始しました。いずれにも自衛隊が参加しています。ヴァリアント・シールドでは、西アジアにおける対イラン攻撃で使用されたものと同じミサイル発射装置タイフーンが日本国内に配備されます。その射程と配備場所から、タイフーンは現在、中国本土を攻撃可能な位置に置かれています。

軍事演習は、受け入れ国を米国の軍事作戦、指揮、意思決定に組み込むことで、米国がその戦争遂行手法を洗練させることを可能にします。しかし同時に、民衆の運動が申し入れ、大衆行動、軍事施設に対する直接行動など多様な戦術を用いてこうした演習を中止・撤回させることに成功するならば、同盟国や従属国の軍隊に対する米国の支配を弱め、米国の大量破壊能力を低下させ、米国主導の戦争ドクトリンの不可欠な部分を弱体化させることができるのです。

現在、私たちは日本、オーストラリア、ハワイ、フィリピン、韓国、インドネシア、その他多くの場所の活動家たちと力を合わせ、こうした戦争演習に反対する闘いを結集させています。私たちは「戦争演習に反対する民衆キャラバン」を展開しています。このキャンペーンは、軍事演習が行われている国々での啓発活動、宣伝活動、抗議行動への動員を含めて展開されており、参加国を次々とつなぐ「キャラバン」のような

形式で、各地の動員を連携させていくものです。私たちは、日本における皆さんの抗議や抵抗の取り組みとこのキャンペーンと結びつけ、民衆の連帯を築くことで、海を越えた闘いを強化することを呼びかけます。

米軍基地へのあらゆる打撃、あらゆる軍事演習の中止、米軍の出撃拠点となることを拒否する国々の存在——これらはすべて、平和が「屈従」ではなく「正義」を意味する世界へと向かう歩みです。また、ある国がアメリカ帝国主義からの民族的解放のために闘い勝利することは、自国の民衆の利益に反する形で利用されることを拒絶することでもあります。そうした勝利の一つひとつが、米国主導の戦争体制全体を弱体化させるのです。だからこそ私たちは、パレスチナからフィリピンまで、ベネズエラから太平洋地域に至るまで、自己決定権のためのあらゆる闘いを支持しなければならないのです。

ありがとうございます。連帯を。

宮古島・沖縄島訪問（5/14-18）の報告（スライドとメモで）

5 月 14 日～18 日にかけて、関西と関東から合計 6 名が宮古島と沖縄島を訪問しました。琉球弧が進む戦争体制を実感し、辺野古新基地建設反対運動への攻撃を実感しました。その報告会を 6 月 14 日にオンライン併用で行いました。その時のスライドとメモで簡単に報告します。

●5/15 宮古島フィールドワーク

ミサイル基地いらない宮古島住民連絡会の清水さんのご案内で千代田（ちよだ）の陸自駐屯地を一回り。



陸自駐屯地の中では、ミサイル発射車両がミサイルを立てている。いつもは見られない光景で、17 日からの軍事演習の準備？

基地の中では、自衛隊員が打ち合わせなどしているようす。しかし、

今回の演習で宮古島初上陸となる米軍がいつ着くか、まだ報道はない。



基地の正面でメロン農家をしている仲里成繁さんのお宅に寄り、ご家族に挨拶。



野原（のばる）の日本軍慰安婦の「女たちへ」の碑、アリランの碑、飢餓に関する兵士の歌碑などを見る。空自のレーダー基地やPAC3を見る。

× バンドレーダーを扱う会社が設置した謎のレーダー群（5 基）を見ながら南海岸を保良（ぼら）へ。



途中の準天頂衛星レーダー群も見（前回は 2 基だったが 3 基に）

沖縄県不発弾保管所は保良訓練場の横。沖縄戦時の 10.10 空襲での不発弾で、全部撤去するには 70 年かかる。宮古での死者は、空襲より飢餓死が多かったそう。

保良訓練場には三つ目の弾薬庫が完成しているが、木が茂り訓練場の内部を見ることができなくなった。



保良に建設中の自衛隊宿舎。しか

し今回米軍が宿泊するには間に合わない。米軍はどこに滞在？



宮古海峡をのぞむ東平安名崎



その後、伊良部大橋を渡って、下地島・伊良部島へ。海上保安庁の拠点港 長山港、通り池、大湿原、下地島空港、佐和田の浜などを見た。

●5/16 沖縄島へ移動

午前便で那覇空港へ。全員合流。
まず普天間基地を一望できる嘉数台公園に。普天間基地には数多くのオスプレイが配備されている。



ドーム北谷で開催される「5/15 平和とくらしを守る県民大会」に参加



夕方、読谷村のチビチリガマの見学

夕食交流会（沖縄料理店）

●5/17 辺野古、安和・塩川

この日は日曜日なので、辺野古の海のテントで状況を聞く。事故に関する心ない落書きも見せてもらった。



事故 2 ヶ月目が過ぎ、海岸で慰霊する人々もいた。

瀬嵩の浜から大浦湾を見る（サンドコンパクション船を数隻並べて「やってる感」演出）



西海岸の安和・塩川を見た後、コンビニで軽食を買い車中で昼食後、南部へ向かう（時間がない！！）



摩文仁の沖縄平和祈念資料館、平和の礎を見学（1 名帰る）

●5/18 再び辺野古へ

5 名でキャンプシュワブゲート前の座り込みに参加。



最後の昼食に沖縄そばを食べる。
那覇空港から帰る。

AWC Youth 関西から

AWC Youth (5/29) イスラーム学習会の報告です！

司会のユースメンバーがグラウンドルールの確認をしたあと、発表者のユースメンバーが、小林泰著『イスラームとは何か その宗教・社会・文化』（講談社現代新書,1994）を参考図書にして、イスラームの基礎知識について発表してくれました。

そもそも、「イスラーム」という言葉のもともとの意味は「帰依する」であり、クルアーンの中の「まことに神の御許の教えはイスラームである」に由来し、わざわざ「教」を付けずに「イスラーム」と呼ぶのが自然であるそうです。そう考えてみれば、そもそも「イスラーム」という言葉は何なのかすら私はちゃんと調べたことがなく、無知であったことを知らされました。

なんとなく教科書などで知っていた単語、例えばクルアーン、ハーフィズ、ヒジュラ、アッラー、ハディ

ース、ウラマー、ウンマ、スーフイズムなどといった単語について、簡潔で分かりやすい解説のおかげで、より正確に理解をすることができました。

婚姻に関する解説もあり、イスラーム法では 1 人の「男性」が 4 人まで「妻」を持てると定められており、それには戦死者の妻やその子の救済という側面があり、「男性」はその妻をそれぞれ平等に扱わなければならないという決まりがあることを知りました。

発表は全体的に、今後のイスラームに関する学習の手引きになるような簡潔で網羅的で分かりやすい解説であり、非常に有意義な学習会でした。



発表が終わったあとに短い休憩時間を設け、ユースメンバーが持ってきてくれたアイスもいただきました。

休憩のあとに、参加者それぞれの自己紹介や感想、質疑応答の時間を設けました。

感想の時間には、発表がとても分かりやすく要点を押さえてまとめられていてありがたかったという感想から、小学生のときからムスリムの人たちが身近にいる中で育ったという自身の経験、フィリピンのミンダナオでイスラームとの接点があった話、日本でのパレスチナに関する行動でムスリムの人とよく出会うという話、宗教全般の話として新興宗教を一概にダメなものとして決めつけて偏見を向ける日本社会に怒っているという話まで、それぞれの参加者から幅広い内容の意見や感想が述べられました。

西洋の植民地主義とイスラームに関する話もなされ、日本においてはイスラーム世界を直接植民地支配下においたわけではないが、イギリスなどの西洋諸国と帝国主義的共犯関係を結んできたので、西洋のイスラームに対する植民地主義的価値観やイスラームフォビア（編集注：フォビアは「恐怖症」の意味）を日本も共有して

いるという話となされました。西洋によるイスラームの植民地支配はイスラームの文化を抑えつけようとしたが、モンゴルによる支配のときはイスラームの文化的なところまで抑えつけるという方向性ではなかったようです。イスラーム世界の歴史を学ぶのにおいても、やはり西洋の植民地主義がイスラーム世界に与えた影響というのは必ず押さえておくべき歴史であると思いました。

西洋におけるイスラームフォビアに見られるように、植民地支配をした相手国の人々に対する差別は苛烈であり、日本における在日朝鮮人などに対する差別も同様です。イスラームフォビアを利用してなされているイスラエルによるガザ虐殺は、朝鮮、台湾、フィリピンなどに植民地主義的侵略支配をした歴史があって今もそれらの国の人々に対する嫌悪や差別が社会のうちに強く根付いている日本にとっても、決して他人事ではないという話もなされました。

最後に、日本においてムスリムの土葬に対する猛烈な反発が巻き起こるなど、イスラーム差別は日本においても非常に深刻な問題であるという喚起がありました。土葬はキリスト教でもなされていて韓国でもなされているし、そもそも日本においても昔は土葬をしていたにもかかわらず、ムスリムによる土葬がこれだけ反発を受けるというのは、日本人のイスラームフォビア由来します。

まずはイスラームについての正確な知識を増やしていくこと、そして植民地主義や帝国主義の問題なども考えながら日本社会におけるイスラームフォビアに向き合っていく姿勢がとても必要だなと感じました。

書籍などを通じてイスラームについての学びをさらに深めていきたいと思ったし、ユースとしてこれからもイスラームに関するなんらかの取り組みは続けていきたいなと思いました。

（AWCYouth 関西メンバー）

アジア共同行動(AWC)日本連絡会議の会員になってください。

アジア共同行動(AWC)は、1992 年の自衛隊の初の海外派兵に反対して、アジア各地の民衆団体が開催した「日米軍事同盟と自衛隊の海外派兵に反対する国際会議」で発足しました。アジア規模で反戦平和・国際連帯を推進する民衆団体の国際ネットワークです。アジア共同行動(AWC)日本連絡会議は、日本において AWC 運動を推進する団体・個人の連絡会議です。趣旨に賛同する団体・個人会員を広く募集しています。



◆年会費(1口)個人 1000 円、団体 3000 円

◆郵便振替口座 番号 00950-9-198941 口座名 アジア共同行動

◆各地の AWC でも一緒に活動して下さる方を求めています。

